

室生犀星の『王朝』における『大和物語』の受容 —「春菜野」を中心に—

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-05-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00065955

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



白一締交經幾時 行年未老鬢先衰
生平愁緒知多少 都入鏡中化作糸

⑫ 仲秋 滄浪（8月16日）

〔第47号所載〕

疎雨成涓滴 幽人嬾倚樓 雲連江上暗 月入笛中愁
腸斷他鄉別 夢歸故國秋 候蟲如有意 唧唧未曾休

8. 元禄六年（一六九三）三十八歳

① 元日 丹直清（1月13日）

〔第47号所載〕

鐘漏聲稀向曉天 高城淑氣五雲連
三朝膏雨散初澤 六出瑞花迎有年
上國衣冠鴈列裏 小臣拜舞獸樽前
儒家門外經過少 獨對書牕讀舊編

② 酬藤有禎對花述懷和歌 鳩巢（3月2日）

〔第44号所載〕

滿城桃李路塵中 靜處看花自不同
月夜清香須愛翫 明朝乱落任春風

室生犀星『王朝』における『大和物語』の受容

——「春菜野」を中心に——

孫 媛 媛

一 はじめに

一九四〇年に、室生犀星は『大和物語』や『伊勢物語』、謡曲などに取材して王朝小説の創作を始めた。これらの作品は様々な方面から批評されている。その中で、『大和物語』取材作品については、次のように議論されている。

本多浩は「大和物語」を素材としても、その素材を、また王朝の世界を忠実に描きだすことではなく自由奔放に自己の世界を創りだす」と述べている。また、志村有弘は「第二期は、昭和十六年に『王朝』が刊行され、『蟲寺抄』・『余花』・『玉章』が刊行されるにいたる、昭和二十二年頃までの時である。（中略）第二期は、古典文学を踏まえながらも、想像を自由に飛翔させ、ある時は原文からは和歌のみを採録して、他は作者の創作という場合もあり、作者自身が古典の世界にまことに自由に遊んでいる感じがする時代である」とする。どちらとも犀星が『大和物語』から取材しつつも自由に想像し、創作したかのように論じている。

さらに、高瀬真理子は「大和物語」の「蘆刈」を分析しながら、「萩吹く歌」の生絹が「運命に流されるいにしえの女ではなく、すでに自我の確立した近代の女性の一面を持っている」冷たい女であると指摘している⁵。そして、安田義明は「彼女たちはな」を『大和物語』の「生田川」と比較して、橘の死の時間や方法はその死に必然性を与えていると結論付け、改められた和歌から「生への未練」を見出している⁷。つまり、具体的な作品を解釈する際にも犀星の独創性が中心に論じられており、『大和物語』からよく取材できて自由に発想し、創作したという印象にとどまっている。

これらの議論は『大和物語』取材の順調さや、創作の自由さ、そして作品の価値を肯定しているように見える。『大和物語』を典拠にして書かれたものの成功が強調されている。小説が成り立つまでの全過程で、犀星は何の難問にもぶつからなかったかのようである。

しかし、犀星と折口信夫の対談⁸では、異なる状況が示されている。そこで、折口が「文芸春秋に出たあれは、何でした」と聞くと、犀星は「あれはいろいろな話をあつめた行方です。どうもあの時代

のものを読んでみて書かうとすると物語は十行位でもこつちは、まあ三十枚ぐらゐにはなりません。ところが、その十行の中からなかなか出られない。その物語の中に頭をつつこんでゐてなかく出られない。二週間ばかりたつて自分のものにしてはじめて書くといふ段どりです」と答える。ここで、犀星はその典拠の物語に縛られて自由に発想し、創作できないという難問を訴えている。そして、典拠の「十行位」の内容によって「三十枚ぐらゐ」の原稿が書けたことや取材して「二週間ばかりたつて自分のものにして」作品を書き上げたことから、犀星は最後にこの難問を解決できたかのように見える。だが、折口は「あなたは大和物語よりも、伊勢物語の中へ歩みをお移しになつた方が、いゝのぢやないですか。大和物語は、空想の余地のない書き方だと思ひます。伊勢物語の方はもつと自由なところをひろくと見せてみませんか」と助言する。その後、犀星は『伊勢物語』からも取材しはじめた。要するに、『大和物語』の特質のため、犀星は創作した際に、もとの物語の経緯に囚われて自由に自分の特色を発揮できないという難問にぶつかったのだと考えている。ゆえに、この『文芸春秋』に発表された作品でもその難問はまだ解決されていない可能性もある。

このように見ると、先行研究と対談に見られる犀星自身の認識は矛盾していると言える。先行研究で主張されている自由さより、対談ではむしろ窮屈さの問題が出されている。だとすれば、犀星の王朝小説における『大和物語』の受容の実態はまだ解明の余地があるだろう。事実は自由なのであろうか、それとも窮屈なのであろうか。その事実を明らかにしなければならぬ。

また、「春菜野」の先行研究はあまりないため、評価されていないように見える。しかし、『王朝』における犀星の短い序文で具体的作品名を指さずにまとめられた平安朝の美人の特質はあきらかに「春菜野」の女主人公の人間像であることから、「春菜野」は犀星の王朝小説の研究で非常に重要な作品であると言える。すなわち、『王朝』あるいは犀星の初期の王朝小説を解釈することにおいて「春菜野」は重要な位置を占めている。

そこで、ここでは、『王朝』を取り上げ、「春菜野」を中心として典拠と比較しながら、『大和物語』の受容の実態を解明する。なお、筆者は『大和物語』について、『平安朝物語集』とともに、『新編日本古典文学全集12』を参考とした。「大和物語」における「春菜野」と関わる章段は『平安朝物語集』では一四四段、一五二段、一六九段であり、『新編日本古典文学全集12』では一四九段「沖つ白浪」¹⁶、一五七段「馬槽」、一七三段「五条の女」に該当する。

二 典拠について

前述したように、「春菜野」の典拠は「沖つ白浪」や「馬槽」、「五条の女」と呼ばれる『大和物語』の三つの章段である。では、この三つの章段はどのような物語なのであろうか。「春菜野」との比較の上から重要な部分を中心にあらすじを以下にまとめる。

「沖つ白浪」では、男が愛する女が貧乏になったため、裕福な女の所に通うようになった。貧乏な女は妬むが我慢して本心を隠す。男は彼女に別の男ができた疑い、身を隠して女を窺う。しかし、女

『王朝』⁵は犀星が最初に出した王朝小説集である。これを犀星が創作した際、参考にした『平安朝物語集』と比較すれば、『王朝』の十篇には『大和物語』を典拠とする作品が五篇あることが分かる。すなわち、「春菜野」¹¹、「まゆみ」¹²、「あやの君」¹³、「姫たちばな」¹⁴、「荻吹く歌」である。

また、前述した対談においては、折口がタイトルを示さずに「文芸春秋に出たあれ」と述べている作品がある。これはどの作品なのかという条件によって確認してみる。

同じ対談で犀星は「七つ」の作品を書いたと述べている。すなわち、一九四一年三月二五日の対談まで犀星は七つの王朝小説を発表した。しかし、『室生犀星全王朝物語下』の「初出・底本一覧」を教えると、対談前には六つの作品を確認できる。この中で前述の条件を満たす作品は「春菜野」である。では、残った一つほどの作品なのだろうか。一九四一年九月の『王朝』が刊行される前に書かれた「まゆみ」は「初出未詳」なので、これがその一篇に該当するはずだ。そして、犀星が最初の王朝小説を発表した一九四〇年一月から対談する時点までの『文芸春秋』には「まゆみ」がない。したがって、『文芸春秋に出たあれ』は「春菜野」を指している。

つまり、犀星は「春菜野」の典拠に縛られた創作の窮屈さという難問を告白しているのだ。折口の考えによれば、その難問は『大和物語』の性質によるものである。だとすれば、この難問は「春菜野」に限らず、ほかの『大和物語』をもとに書かれた作品にも共通していると考えられる。

は男を思う心情を和歌に詠み、泣いていた。しかも、その思いの熱さは胸を金鏡の水に当てると、水が沸いてくるほどであった。男はこの深い愛情に心を打たれてしばらく裕福な女の所へ行かないようにした。ある日、裕福な女のことを心配して訪ねた際に彼女の下品さを見てしまったので、二度とそこへ行かなくなった。

「馬槽」では、男は変心して新しい女を作った。通いながら、もとの女の物を次々と新しい女へ運んで行った。もとの女は辛く思ったが、男の仕打ちを許していた。最後に残った物は馬槽だけになる。ところが、ついにその馬槽も運ばれた。同時に、もとの女は自分の辛さを語る和歌を男に送った。男はその和歌に感動し、運んで行ったものをすべて返して、もとの女の所に戻ってきた。それ以降、心変わりすることはなかった。

「五条の女」では、良岑の宗貞の少将が五条あたりの荒れた屋敷で雨宿りをしている。人の気配も見えそうもなかったのに、彼は髪の長い女に出会い、一夜を過ごした。翌朝、その女の心を示す和歌とともに、春菜の蒸物も出される。そして、少将はその和歌に心を打たれながら春菜を食べた。非常に美味しかったので、少将はお礼の物を贈り、この貧しい家に通うようになった。

この三つの章段から、犀星は具体的に何を讀み取ったのだろうか。これについては、『王朝』での犀星の序文が一つの手がかりになる。その序文で、平安朝の美人に関して、「髪を長く背に垂れ、厚化粧を施し、悲しいまでに淑かで弱々しかった彼女らの心に、却つて熾烈であつたやうな情感に私は手をふれて見たかったのである」と記している。ここで犀星は長い髪や、心を込めた化粧、悲しくさせる

ほど上品で穏やかで弱そうな姿に隠された激しい心などに目を留めている。これらの特質は前述した三つの章段にも見られる。

「沖つ白浪」に登場する貧乏な女はその代表的な例であろう。ここでは髪を梳かす様子が描かれ、化粧が目ざされている。また、外面は「悲しいまでに淑かで弱々しかつた」。しかし、内面には「熾烈」な情感が溢れている。それゆえ、夫が裕福な女へ通うようになったことに対して、平気なふりをするが、夫のいない時には恋しく思つて泣く。特に、金匱の水までも沸かさせるほどの胸の熱さ、感情の深さを示す点が特徴的である。このような特質の女は「馬槽」にも描かれている。その女は夫が新しい女へ物を運ぶことを辛く思いながらも何も言わない。この二人の女はともに夫に傷つけられても心変わりせず、優雅な姿で愛情の清らかさを保っている。こうした落ち着いた様子は女の上品さや穏やかさなどを表している。同時に、夫の裏切りに反抗しない弱さと悲しさも示している。さらに、「五条の女」の女主人公は長い髪を持っている。このように、この三つの章段からも犀星が好む平安朝の美人の特質を見いだせる。この美人の特質は犀星による「春菜野」の典拠への理解であるとも言えるだろう。

それでは、これらの特質はこの三つの章段をもとに書かれた「春菜野」でどのように表現されたのだろうか。そして、美人の特質以外、この三つの章段に犀星が興味を持っていたものはないのだろうか。すなわち、この三つの章段ひいては『大和物語』は「春菜野」にどのような影響を与えたのだろうか。これから、「春菜野」の本文を考察してこの問題を考える。

三 人物造形における特徴

小説は様々な要素から成るが、前述した美人の特質は人物造形に関わるので、それを確認するなら、物語の登場人物を見なければならぬ。ここでは「春菜野」の人物造形や設定の意義を検討し、犀星の語った美人像を明らかにする。そのうえでほかに注目すべき点があるかどうかもある。

経透という男は妻真葛の家ばかりではなく、「立田山の畔の女」の所にも通っている。そして、夫が別の女のところへ通うことに対して、真葛は顔に「嫉妬がましい曇」や「愁のあと」などを示すどころか、「うれしさうに」それを勧める。しかも、通う時の贈物は自ら用意し、それが大きな物の場合は経透の面子も考慮して夕暮れに「人目に立たぬ」ように運ばせる。このように、真葛は経透の前に「平気」な様子を見せている。まるで彼女は夫を愛さなくなったかのようにである。そのため、経透も真葛に別の男でもできたかと疑う。

しかし、経透が出かけたふりをして真葛を覗くと、「丈ある髪」を梳かし、「身なりをととのへ」、「膝を正し」、「一糸もみだれぬ」美しい姿で「夜の更けるまで寝所にはいら」ずに自分の帰りを待っている真葛の「愁」を見てしまった。真葛は夫の仕打ちに悩んでいたわけである。また、真葛自身も「月もない暗夜は殊にさびしい時がございます」とはつきり言いながら、寂しさを解消するために作った和歌を経透に読ませることで寂しさを暗示する。「立田山の畔の女」へ自分の物を贈らせる理由についても、夫に聞かれた時には素直に

答えず、沈黙を守るが、捨てられて完全に一人になった時にはその本音を吐露する。それは経透に「好く思はれない」ためである。「立田山の畔の女」に贈った物は、彼女にとって、自分の身代わりとして夫に近づいて愛を示す道具である。同時に、夫の心に「そむかないやう間接に」「立田山の畔の女」に頼んで夫を喜ばせる役割も果たしている。沈黙の裏には深い愛が潜んでいる。この愛は真葛が常に穏やかな態度を出す理由でもある。なぜなら、彼女はこうした態度によって夫を安心させることができると考えているからである。すなわち、愛するからこそ真葛は夫を思いやって咎めなかったのである。いづれにせよ、すべては「好意」的で「優しい」心によるものであるという。真葛は実はまだ経透を愛しているばかりか、自分の所に引き戻そうともしていると考えられる。

真葛の愛と善意は、経透を喜ばせる以上に彼女を傷つけた罪を認識させるものとなった。当初の彼は困惑、次に不安や苦痛、そして悲哀、さらに恐怖まで感じた。最後は真葛に「見下げ果て」られたとさえ思い込んで恥じ入る。かつ真葛の沈黙は「この世のものと思へない程」「清い」限りだとも考えている。換言すれば、経透は現実世界に彼女のような良さがあるかどうか疑うのである。それに加えて、「立田山の畔の女」の物欲の限りなさや外面の卑しさにも我慢できない。とうとう経透は行方不明になった。

彼の行方を尋ねてきた「官の人」が見た真葛は「近くの童子童女を集めて、墨する事、筆はこぶ事、和歌する事など」を教えている。彼女は元氣なようである。のみならず、経透の面子も保っている。例えば、経透の行方を聞かれたときには「旅に出てゐる」と答え、「立

田山の畔の女」へ贈った自分の家具については「経透の帰るまでは仕舞置いてにございます」と弁解し、一人で過す寂しさは「童子童女等」との暮らしを理由として否定する。真葛は、嘘を付いて夫に傷付けられた辛さを隠す。こうして経透を庇い、彼の面子が立つようにした。つまり、真葛は経透の失踪に悩まず、落ち着いているように見える。まるで彼女はもはや彼を愛していないようである。

一方、結末では別の情景が作られている。まずさすらいの経透はやっと深夜に帰ってきたが、最初は家に入らず、静かに「家の築地の前に」立って真葛の様子を確かめる。すると、真葛はまだ寝ずに「さびしすぎるくらゐ」「端然とした手つき膝つき」で毯を編んでいた。独りぼっちなのに、彼女の姿には少しのだらしなさもない。この姿から、彼女は優雅な姿で経透の帰りを待っていることが伺える。夜の更けるまで待つことは彼女の深い寂しさを表現している。また、念のため、経透は真葛に挨拶してから家に入った。そして、久し振りに夫の声を聞いた真葛の顔は「ふしぎさうな、様子」をした後、「ひきしまつたかに見へた」。最後、我慢できずに彼女は寝室に入った。再び出た時の顔には「流涙のあとの冴えた晴やかさ」があった。真葛は思いがけない再会を嬉しく思つて泣いたようであった。激しい反応は経透への深い愛を表している。真葛の本心は、依然経透を愛してその帰りを望んでいたのである。

以上のように、別の女の所に通うことにしても、行方不明にしても、真葛は毎日「丈ある髪」を梳いて真面目に化粧し、優雅な姿を保っていた。あたかも彼女は既に心変わりしたかのようにであった。しかし、真葛は相変わらず経透を愛していて、彼の帰りを待つだけでなく、

引き戻そうともしていた。表は平静であるが、裏には「熾烈」な心が隠れている。なお、どのような場合でも反抗せずに夫を許して待つしかない真葛は弱そうにも見え、人々を悲しませると言っても過言ではない。この弱さのために、彼女は「身にしみて哀れが深かつた」と告白し、経透も「無為な悲しみに惹き込まれた」のである。かくして真葛は、前述した犀星の好みに合う美人の特質を悉く備えている。彼女は典拠における女主人公たちの特質に基づいて造形されている人物である。

ただ、具体的な描写には相違点もある。例を挙げれば、別の女へ通うことを夫に勧めるときは嬉しそうな顔つきで、夫の別の女への贈物は自ら用意し、夫の面子をよく保ち、夫に別の女へ物を贈らせたとき、穏やかに行動したりする理由は、彼に愛を示して引き戻そうとするためであり、夫と再会する時には激しく反応する。いずれも典拠にない表現であるが、犀星が考える美人の特質から逸れていない。嬉しそうな顔つきや贈物を用意することは真葛の「平気」さを強めた。このように面子を保つことは外面では上品に見られ、内面では経透を愛することである。別の女への贈物と穏やかな行動はその目的から真葛の「熾烈」な心の現れであることが読み取れる。再会する時の激しい反応はその「熾烈」さを一層強めている。これらはただ犀星が考える美人の特質を際立たせただけであり、典拠からそれほど離れていない。

また、前述のように、経透は真葛を二回誤解した。一回目は、「沖つ白浪」と同じように女の裏切りを疑うことである。二回目は、独創的で女の良さの真实性を疑うことである。そして、二回の誤解に

伴って、真葛の「淑か」と「熾烈」さも二回描かれている。つまり、彼女の美人の特質は繰り返し強調されているのである。また、二回目の疑いは経透の行方不明を招くとともに、真葛の良さも美化する。疑われたのは真葛があまりにも良すぎるからである。さらに、二回目の誤解を解くきっかけとして、経透は五条あたりで一人の女に出会った。

経透は彼女が春菜を摘む情景を見て、真葛の摘む様子を想像してその微笑みや「柔和さ」を恋しく思いながら、その女の行動を「いましのごとき」、「その美はしさこの世のものと思はれず、その和やかさは都のいづれにも影だに求めざるもの」と心で真葛に呟いた。また、女にご馳走されることは空腹の彼にとつて「真葛の心をひらき見るやうな思ひ」であった。なぜなら、春菜の料理は彼のために作られたからである。この心遣いを知ると、彼は非常に感動して真葛の心も理解できた。要するに、経透はここで真葛のような美と善意を味わった。なお、「春菜野」では真葛の春菜摘みも書かれた。家が荒れることや男のいないことにも加えて、この女は真葛と共通点が多い。彼女は真葛の同類として造形されたと言える。同類の存在は真葛の良さの真实性を証明するため、前述のように経透は真葛の心を理解することができた。同類を設定したことは真葛の美人の特質を表現するためと思われる。同じ目的で対照的な「立田山の畔の女」も登場する。

「沖つ白浪」における立田山あたりの女は、外面が卑しいが、裕福で男を大切にする。つまり、欠点以外に、良い点もある。しかし、「春菜野」の「立田山の畔の女」は欠点ばかりである。例えば、卑しい

外面で限らない物欲を持ち、捨てられた後に姿を消すと同時に真葛の馬槽を置いて経透の恥を晒し、さらに糸毬をくれない童真楯を捨てた。彼女は下品で落ち着きもないわけである。通われた以上、当初の彼女には良い点があったはずである。だが、「春菜野」の物語はその部分が省かれており、わざと無視されたようである。だとすれば、不完全な物語は「立田山の畔の女」の悪さを強調して真葛の良さを引き立てていると思われる。

このように、二回目の誤解と同類や対照の造形は真葛の美人の特質を際立たせている。すなわち、経透や五条の女、「立田山の畔の女」の造形に独創があるにもかかわらず、その役割は真葛の美人の特質を一層よく表すことにある。前述のように、真葛の美人の特質は、犀星の典拠への理解についても言える。よって、ここも典拠の影響から逃れていないと言える。

では、人物造形以外の要素はどうなっているのだろうか。次は出来事から見て検討する。

四 出来事の描写

「春菜野」には典拠と共通する出来事が所々見られるが、男の行動につれて変化するので、ここでは、男に関するものだけを検討する。

まず、「沖つ白浪」では男は妻が「わるくなり」、「富みたる女」に通うようになった。別の女を作るのは生計のためである。「馬槽」で男は「心変わり」して別の女を作った。一方、「春菜野」では経透も「立田山の畔の女」を作ったが、その原因は語られていない。次に、「馬槽」

と「春菜野」はともに妻の物を別の女に運ぶことを描いている。ただ、「馬槽」の男の心変わりに対して、「春菜野」の運搬は主に「立田山の畔の女」の物欲や真葛の頼みによる行動である。また、「沖つ白浪」の、妻の穏やかさを疑い、身を隠して覗く場面は「春菜野」にも書かれている。さらに、結末は皆妻の所に帰った。その原因について、「沖つ白浪」では妻の深い愛や立田山あたりの女の卑しい外面が設定され、「馬槽」では妻の辛さを示す和歌が用意されている。一方、「春菜野」では「立田山の畔の女」の外面の卑しさや物欲の限りなさ以外に、帰る原因には「五条の女」のもてなしに癒やされたこともあるように見えるが、前述のように、そのもてなしが真葛の良さも象徴するので、根本的な原因は真葛の愛と淑やかさにあると思われる。

このように、典拠の男の出来事は「春菜野」にも多くある。ただ、それぞれの原因には新しさもある。具体的に言えば、物欲や頼み、淑やかさが挙げられる。だが、相変わらず典拠から離れていないように見える。「馬槽」では男が物をたくさん運び出すにもかかわらず、物を貰う女が登場していない。それに加えて、「立田山の畔の女」の物欲はちようど物をたくさん運び出す原因になれる。ゆえに、「春菜野」の物欲は典拠への解釈であると考えられる。また、「馬槽」では女が夫の物を運び出すことを許すが、その理由は真葛の物を運び出すことを頼む目的から見出せる。なぜなら、その目的は夫を愛して引き戻すことなのである。それゆえ、「春菜野」の真葛の頼みは典拠への解釈なのである。さらに、「沖つ白浪」では男が立田山あたりの女の卑しい外面を見ただけで離れる。ここから、男は女の優雅な外面を重視することが伺える。そして、真葛の淑やかさを強調するの

もその通りである。そのため、「春菜野」の淑やかさは典拠への理解である。つまり、ここでの新しさはただ犀星の典拠への理解や解釈だけである。

五 細部の表現の扱い

さらに、細部の表現において、典拠と「春菜野」の共通点を確認する。

「沖つ白浪」の「往ね」といひければ「や、前裁の中に隠れて」「月のいとみじうおもしろきに」「頭かい梳りなどして居り、夜更くるまで寝ず」「大櫛を面櫛にさしかけて居り。手づから飯盛り」といった表現は、「春菜野」では「真葛があらにはいはぬが女の許に行けよといふ意味だつた」「前裁に身をひそめた」「月あかりに心から痒さうにまた心地好く」「髪をすき」「襟あしを拭き、そして衣裳を着かへ」「夜の更けるまで寝所にはいらない」「大櫛を面櫛にさしかけ、手づから飯を盛つて」となっている。

「馬槽」の「塵ばかりの物も残さず皆持ていぬ」「馬槽のみなむありける」「真楯といひける童を使ひけるして、この槽をさへ取りに遣せたり」といった表現は、「春菜野」では、「家の中は殆塵一つ残さず撤ばれ」「家にあるものは既に馬槽があるだけ」「真楯といふ童がゐて、それに使して取らした」とされている。

「五条の女」には「五条辺にて雨いたう降りければ「や、荒れたる門」「五間ばかりなる檜皮屋の下に、土やぐらなどあれど」「殊に人など見えぬ」「階の間に梅いとをかしよう咲きたり」「人ありとも見えぬ御簾のうちより」「薄色の衣」「濃き衣の上に著て」「丈

だちいとよき程なる人」「髪丈ばかりならむ」「女驚きて、人もなしと思ひつるに」「簾も縁は蝙蝠に食はれて所々なし」「昔覚えて畳などよかりけれど」「日もやうく暮れぬれば」「堅塩肴にして酒を飲ませて」「広き庭に生ひたる菜を摘みて、蒸物といふ物にして、茶碗に盛りて、箸には梅の花の盛なるを折りて、「小舎人童」などの描写がある。それらの描写は「春菜野」にも取り入れられている。例えば、「五条辺りで不意の雨あし」や、「塙も荒れて居れば庭も荒れてゐる」「五間ばかりからなる檜皮屋の下に、土やぐらの処々」「人の気はひもしない程寂そりとしてゐた」「階の間に梅さへ散り濡れ」「人のみさうな様子もなかつた」「御簾の内からたて紫横白糸の薄色の衣、濃き衣の上に著た丈高い一人の女が、人のみない筈であるのに経透の姿を見て声をあげて驚いたのであつた」「丈ある髪」「御簾の縁も大方は蝙蝠の歯に食はれ食はれて、処々失せ剥てゐたが、畳だけは昔覚へてや、に美しく艶打つてゐた」「日は灰汁のごとく真寂しく流れて四辺はすでに暮れかからうとしてゐた」「酒少し奉りたい」「堅い塩した魚」「広い庭」「春の菜を摘み」「春の菜は柔らかく緑もそのままの色に蒸されて」「塗碗の蓋を取つた」「箸には梅の盛りなるをしつらへ」「小舎人童」などの表現が挙げられる。

このように、「沖つ白浪」「馬槽」や「五条の女」の細かい箇所も「春菜野」はかなり踏襲している。犀星の扱い方の特徴は、着目点を同じ物に置く、同じ意味を保ちながら表現を少し変える、反対の方向へ書き直す、言葉遣いをそのまま使う、などとまとめられるだろう。また、人も見えなさそうな家の様子を繰り返して描くという「五条の女」のくどくどしさも「春菜野」に引き継がれている。

つまり、典拠の女の特徴や出来事、細かい箇所の描写などは、いずれも「春菜野」の創作に大きな影響を与えている。これらの点から、「春菜野」は典拠に非常に近く、犀星の慎重に古典を扱う態度が伺える。これらによって、犀星が創作の際、自由に想像できなかつた状況は説明できる。だとすれば、独創的に見える設定はどのようなことであろうか。

六 独創的に見える設定

「春菜野」では、「黄金の小櫛」「糸毬」、官職などの点に独創的な設定が挙げられる。そして、「春菜野」の先行研究¹⁹⁾では、「黄金の小櫛」は真葛の清さと愛の深さを感じさせるものや新しい女と別れるきっかけを作るものであり、「糸毬」は新しい女の物欲を募らせるとともに、真葛の「清らかな正しさを象徴する」と論じられている。この解釈は主に真葛と「立田山の畔の女」の造形に注目して典拠または「大和物語」にはかかわらない。「黄金の小櫛」は典拠または「大和物語」と無関係のように見える。

しかし、「黄金の小櫛」の源を探求すると、異なる論点が出てくる。「沖つ白浪」では、女の「大櫛を面櫛にさしかけて」いる姿が描かれている。「黄金の小櫛」は文字通り綺麗で小さな櫛なので、飾り櫛すなわち「面櫛」であるはずだ。だから、「黄金の小櫛」は典拠の「大櫛」や「面櫛」からの発想であると考えられる。また、「春菜野」で「立田山の畔の女」は経透に「黄金の小櫛」を奪われた怒りを示すために「大櫛を面櫛にさしかけ」る。この怒りは、「沖つ白浪」の「大

櫛を面櫛にさしかけて」への解釈になりうる。つまり、典拠の女は、怒ったからこそ「大櫛」を使うのである。かくして、「黄金の小櫛」も典拠と深く関わる。

なお、平安時代の櫛の意義について、「平安時代史事典²⁰⁾」では、「髪の毛を梳いたり整えたり、また頭髮に挿して飾りにしたりするのに使う道具。(中略) 饒別に扇と櫛とを人に贈る習慣が『源氏』夕顔・末摘花・賢木等に見えるが、これは櫛で髪を千筋に乱れたのを解き分けるように、千々の道も解き分けて無事に通るべしと祝う意である。また櫛占も行われたし、櫛を投げることは絶縁を意味した」とあり、本橋裕美は、色々々な古典から平安時代の櫛を「饒別の品」や、「別れの櫛」、告げの櫛、「女性の持ち物」などと捉えている。

前述したように、真葛は贈物によって経透に愛を示し、経透の心に背かないように「立田山の畔の女」に頼むので、「黄金の小櫛」は彼女にとって告げの櫛だけである。しかし、経透はそれが不吉な意味の「別れの櫛」だと思っている。ゆえに、経透は悲しんで恥じ入り、「立田山の畔の女」からこの小櫛さえも奪って自分が持つ。こうして小櫛は「女性の持ち物」の意義で言えば、真葛の身代わりになった。持つことは彼女と一緒にいたい気持ちを表す。最後に、経透は真葛の家に帰ることを決めたと同時に、その小櫛を五条の女に贈った。ここでは、小櫛が持て成しのお礼以外に、別れも意味するだろう。要するに、「春菜野」に現れる「黄金の小櫛」は平安時代の風俗に基づいて設定されたのである。

次に、「春菜野」での「糸毬」は「濃き糸うすい糸でか」った「五色の毬」である。また、真楯は「糸毬をくるくる手の上で回し」て

遊んだこともある。それゆえ、この「糸毬」は手毬であることが分かる。では、なぜ「糸毬」と呼ばれているのだろうか。

『精選版日本国語大辞典』²²⁾によると、平安末期の文獻に糸毬は既に見られる。しかし、『伝承と創作郷土のてまり』²³⁾では、「江戸時代に始まったといわれるてまりかがり」とされている。「伝承と創作郷土のてまり」は一般向けの書籍なので、厳密な研究書というより、通俗的な伝承をまとめたものである。つまり、通俗的な伝承では、糸毬の現れた時期は江戸時代であると見做されているわけだ。だが、『日本大百科全書』¹⁶⁾では、糸毬が「江戸時代から少女の遊び道具として発達した」とある。すなわち、江戸時代は糸毬の流行った時期である。この流行は一般民衆に糸毬が出たのは江戸時代であるという誤解を与えたと考えられる。そのため、江戸時代に糸毬がはじめて出たことは通俗的な伝承になってしまったのだ。そして、犀星はその通俗的な伝承の影響を受けて平安時代に糸毬がないと考えていたということも可能である。その糸毬を「糸毬」にあえて改めたのはこのためではないか。この修正も、古典の時代風俗を尊重する姿勢を示している。

さらに、「春菜野」では独創的な官職も設定されている。例えば、真葛が経透に勧めた「その小桂は、経透が国の掾を辞めた時につくつて遣った衣裳であつた」「立田山の畔の女」へ贈った真葛の襲は「大和の掾だつたころにつくつた」ものである。行方不明の経透を捜しても見つからない「友人等は才幹高かつた掾の時代の彼を惜しんだ」。結末で、経透は真葛に「再び官について励む心で帰つて参つたぞ」と告白する。「春菜野」では官職についての記述は以上の四箇所

七 『大和物語』の受容の実態

以上のように、「春菜野」は『大和物語』から多く取材して書かれたものである。しかも、たとえ独創的な表現であっても、『大和物語』に対しての理解や解釈、『大和物語』からの発想、時代風俗への尊重などによるもので、完全に典拠から掛け離れてはいない。創作というより、「春菜野」は典拠への勉強のようである。犀星が『大和物語』にこだわりすぎて、「出られない」状態になって、自由に想像して創作できなかったことが伺える。要は、「春菜野」から犀星の典拠に縛られた窮屈さが見られる。それでは、このような結果になったのはなぜだろうか。

はじめに挙げた対談で、折口はそれが『大和物語』自身の特質によるのであると犀星に教えている。では、この特質とは一体何だろうか。折口は「四十八大和物語の成立——伊勢ノ御(四)——」²⁵⁾で、「伊勢物語は簡潔で、大和物語の方はく／＼してゐる」と述べている。つまり、『大和物語』における物語の描き方は「伊勢物語」より詳しいため、想像できる余地が狭いというわけだ。

また、犀星の古典に対する態度も無視できない。一九四〇年にはじめて王朝小説の創作を依頼されたときの自分について、晩年の犀星は「王朝文学に学のない私は甚だ逡巡したが、それを機会に下読みをし勉強を専らにした」と記している。前述の対談で、『大和物語』をもとに創作する時、「自分では半分恐ろしくわ書いてゐます」と語っている。さらに、『王朝』は折口に序文を書かれており、その跋文にも「折口さんの門人、小谷恒氏に本篇執筆の考証を得た」とあるので、

だけである。具体的な官職は掾だけで、しかも過去形で語られている。官職についている表現は「春菜野」の本文から見つかからない。つまり、経透は官職を持たずに「立田山の畔の女」に通っているわけだ。

官職がないなら、収入は少ない。ゆえに、真葛の物を運び出した後、それを補うことができずに空き家の苦境までに至る。そして、「馬槽」の男は物を買って代わりに妻の物を新しい女のところに運び、帰る時にそれらの物を運び返す。ここでは、男の経済的な能力が見られない。男は官職を持たずに収入が少ない可能性がある。それゆえ、「春菜野」の官職を持たない状況は「馬槽」に対しての解釈であると言える。なお、結末で経透の「官について励む」意味は、収入が増えることである。その収入で物を買って真葛に詫言するというのである。この謝り方は、「馬槽」の運び返すことにも相当するものである。また、官職の名前は異なっているが、「五条の女」では「少将」の官職が出る。官職の設定はここから発想されたのではないか。「沖つ白浪」の男は生計のために裕福な女へ通う。この男も官職を持たずに収入が少ない可能性がある。かくして「春菜野」の官職は典拠に対する解釈や発想によるものであると思われる。

このように、「黄金の小櫛」、「糸毬」、官職は独創的で典拠と無関係のように見えるが、典拠から発想されたものや、典拠に対する解釈によるものや、平安朝の風俗を尊重するものであると考えられる。つまり、これらの設定も犀星が典拠を考える上での構想であつた。

時代考証の質は古典に詳しい折口と小谷恒に保証されると言えるだろう。これらのことから、王朝小説の創作を始めた頃の犀星は、古典を恐れて時代考証を重視していたことが分かる。このため、犀星は古典の知識を慎重に扱って、自由に書けなかつたのではないか。「春菜野」が典拠への勉強のように見えるのもこのためだと考えられる。

こうして、犀星の『大和物語』の受容の実態はある程度見えてきた。ただし、「春菜野」は非常に早い時期に発表された作品である。こうした窮屈さはただ初期の問題だけであるかも知れない。したがって、『大和物語』受容の全体像にはまだ距離がある。今後は、引き続き『大和物語』を典拠とする、ほかの犀星の王朝小説を考察して、その全体像を明らかにしていきたい。

注

- (1) 室生犀星が『伊勢物語』や『大和物語』、『蜻蛉日記』、謡曲などに取材して作った小説を指している。これらの作品を編集して、室生朝子は『室生犀星全王朝物語』を作った。
- (2) 本多浩「室生犀星ノート——「王朝もの」を中心に——」『徳島大学学芸紀要(人文科学)』一九六九年
- (3) 志村有弘「室生犀星——王朝を求めた自由な作品群——」『国文学解釈と鑑賞』一九九二年五月
- (4) 室生犀星「荻吹く歌」「婦人之友」一九四〇年一月
- (5) 高瀬真理子「荻吹く歌」論』『室生犀星研究』一九八七年四月

- (6) 室生犀星「娘たちはな」『日本評論』一九四一年三月
- (7) 安田義明「室生犀星「娘たちはな」——折口の物語観を視座にして——」『芸術至上主義文芸』一九九三年一月
- (8) 室生犀星・折口信夫 対談「古典について」『むらさき』一九四一年六月
- (9) 室生犀星『王朝』実業之日本社、一九四一年九月
- (10) 『平安朝物語集』(武笠三校訂) 有朋堂書店、一九三二年五月(『大和物語』の引用はこの本による。)
- (11) 室生犀星「春菜野」『文芸春秋』一九四一年一月(本文の引用はここによる。)
- (12) 「まゆみ」は「初出・底本一覽」(室生朝子編『室生犀星全王朝物語下』作品社、一九八二年六月)によると、初出未詳である。
- (13) 室生犀星「あやの君」『婦人之友』一九四〇年二月
- (14) 室生朝子編『室生犀星全王朝物語下』作品社、一九八二年六月
- (15) 『新編日本古典文学全集12』(校注・訳者・片桐洋一・福井貞助・高橋正治・清水好子) 小学館、二〇〇四年五月
- (16) 「沖つ白浪」の細部の描写も「春菜野」に多く取り入れられているので、『伊勢物語』の「筒井筒」は「沖つ白浪」と似ているが、「春菜野」の典拠ではない。
- (17) 上坂信男「室生犀星と王朝文学」『三弥井書店』、一九八九年七月の「春菜野」では、「他人の手前夫の面目をつぶさぬように取り計らう」とある。
- (18) 上坂信男「室生犀星と王朝文学」(三弥井書店、一九八九年七月)の「春菜野」では、「立田山の畔の女」と真葛の対照も書かれて

- いる。
- (19) 高瀬真理子「春菜野」——無償の愛のパラドックス——『実践国文学』一九九二年三月
- (20) 「櫛」『平安時代史事典』角川書店、一九九四年四月
- (21) 本橋裕美「平安の櫛と扇をめぐる——物語における機能と変遷を中心に——」『王朝文学と服飾・容飾』竹林舎、二〇一〇年五月
- (22) 『精選版日本国語大辞典2』小学館、二〇〇六年二月
- (23) 尾崎千代子「伝承と創作郷土のてまり」マコー社、一九七八年七月
- (24) 『日本大百科全書16』小学館、一九八七年七月
- (25) 折口信夫「四十八大和物語の成立——伊勢ノ御(四)——」『折口信夫日本文学史ノートII』中央公論社、一九五八年二月
- (26) 室生犀星「追記」『かげろふの日記遺文』講談社、一九五九年一月

戦時下における内地外地の小売書店 ——企業整備、共同仕入体、読者隣組——

日比 嘉高

1 企業整備とは何か

アジア太平洋戦争末期、日配——戦時下の国策配給会社である日本出版配給株式会社——の営業顧問となっていた野口兵蔵は、会社の命を受け各地方をまわっていた。小売書店組合の幹部らに対し、出版物の「計画配給」やそれにもなう地域書店の転廃業についての説明を行っていたのである¹⁾。青森で宿泊した、その晩のことだ。

夜中に私の泊まっている宿へ乳呑み児をおぶった小売店の奥さんがたずねて来た。

「私の店は止めさせられますが、夫は戦地へ出て、後に残った私と子供と両親とで、これからどうやって食べていくのか、生きる道を教えて下さい」と涙ながらに訴えられたが、一言として返す言葉がなかった。

戦後になって野口が「企業整備で私が忘れられないこと」として

回想している、戦時下小売書店をめぐる悲劇の一場面である。店をやめるのは、店を預かっている彼女の意志ではない。夫は徴兵されており、家には子供と両親がいる。一家の生計を立てる手段であった本屋である。それが所属組合の指示によって、営業を止められてしまう。

小売業の「企業整備」とは、アジア太平洋戦争末期の決戦経済体制のもとで、生産資源の合理化計画化を押し進めるために、企業の規模や数を減らし、取引形態、必要な労働力などを適正な形へと導いていくことであった。これにより、企業の合同や休眠が強制的に押し進められていった。

企業整備の目的は、「これを要約すれば我が国が大東亜戦争に勝抜かんがため」であった²⁾。この後経緯は詳述するが一九四二年四月二一日に「小売整備要綱」が閣議決定され、企業整備令が翌五月一三日に発令公布³⁾、これに基づいて、中小の商工業者の転廃業が進められた。小売業の企業整備は、「配給機構の整備と労務の充足の二つ」⁵⁾を目的とし、「国民更生金庫の拡充、共助施設に対する補助金、